

北海道支部会報

日本細菌学会北海道支部



目 次

表紙絵図の説明	2
第65回 日本細菌学会北海道支部学術総会を迎えるにあたって	
第65回 北海道支部学術総会長 渡邊継男	3
研究室紹介	
1 旭川医科大学細菌学講座	東 匠伸 5
2 "HISLAE"	小野 悅郎 6
3 帯広畜産大学・獣医公衆衛生学教室35年の歴史	石黒 直隆 7
平成8年度 支部活動記録	10
平成8年度 会計決算報告	12
平成9年度 会計予算	13
支部会則	14
平成9年度 協賛会社一覧	16
支部会員名簿	17
平成9年度 支部役員名簿	23
歴代支部長名	24
編集後記	25

表紙絵図の説明

Edward Jennerが種痘接種実験を始めて200周年になる（1796年5月14日）という。論文が発表されたのは1798年のことである。

Jennerの業績と桑田立斎の北海道での種痘活動を讃える気持ちを込めて、今回の会報では蝦夷人種痘図のひとつを選んだ（現存する絵図は6種類あると漏れ聞いている）。文政5年（1822）から安政元年（1854）にかけて北海道でも天然痘禍に見舞われ人口が著しく減少したので、箱館（現函館）鎮台奉行はアイヌ人の痘瘡禍の救助を江戸幕府に対し要請した。因みに日本で初めて牛痘種痘法が行われたのは1849年（嘉永2年6月）である。

これを受け幕府は蘭方医桑田立斎や深瀬洋春らを救助の任にあたらせた。桑田立斎一行が北海道に向かったのは安政4年（1857）5月末のことである。同行者は他に門弟の西村文石を含め総勢18名と馬3頭であった。同行者の中に種痘児1名〔当時は小児から痘苗（漿液や痂皮）を採取して、その場で未種痘児に植えた。つまり植え継ぎのため〕とその父母2名が含まれている。

絵図は隅に炉を切った板敷きの奉行所大広間にアイヌの人々が集まっている。上座には奉行村垣淡路守が代官を従えて座り、その前では紺毛氈に座った黒紋付姿の立斎が弟子西村文石とともに種痘を行っている。その側では、奉行所の書記がアイヌ人の記録をしている。旧暦の6月であるが、炉には火が燃え、寒さがまだ厳しそうである。種痘は3日をかけて320人に行った。遠くはクナシリ島まで行き、9月下旬までに6、400人あまりに接種した。

この種痘図は箱館の杉浦嘉七という人が画家に描かせて奉行の村垣淡路守に献上したものであるという（二宮陸雄著、種痘医北城諒斎—天然痘に挑む、平川出版社、東京、1997年より引用）。

第65回日本細菌学会北海道支部学術総会を迎えるにあたって

北海道大学歯学部 口腔細菌学講座

渡 邊 繼 男

第65回日本細菌学会北海道支部学術総会のお世話をするように、というお話しの電話を平棟孝志教授からいただいたのは、今年の始めのことでした。もともと、私がそのような大役に向くな人間であることは私自身よく承知しておりましたので、万が一そのようなお話しがあったら辞退させていただこうと、考えている矢先のことでした。しかしながら、平棟教授の否やを許さぬ勢いに気圧されて、お受けすることになってしまいました。非常に光栄なことではありますが、分不相応な役割に戸惑いを感じております。

私は、1964年に東京医科歯科大学歯学部口腔微生物学講座に大学院生として籍を置くことになって間もなく、日本細菌学会に入会し、早速、1965年の第38回日本細菌学会総会（総会長；清水文彦教授、医学部微生物学講座）の準備要員の中に加えていただき、貴重な経験をさせていただきました。

課せられた仕事の中で、最も印象深いのは抄録集の校正でした。当時、抄録原稿は手書きが普通でしたので、すべての原稿が端正な字で書かれているとは限らず、二回以上の校正を要するものが多くいたように思います。大変な仕事でしたが、非常に勉強になりました。

学会が始まってからは、主な仕事としてスライド係りを命ぜられました。その会場で、ただならぬ場面に遭遇してしまいました。ある講演について激しい意見のやり取りがおこなわれ、演者は目に涙さえ溜めて立ち往生となっていました。会場は混みあっていたために、会場の出入口あたりに大勢の人が立っていました。その中の一人が最も激しく意見を述べていましたが、最後に、「そんなことは、?????という本の何ページの何行目に書いてある。そんなことも知らんのか？」と言って、会場を出て行ってしまったのです。その後の顛末は全く思い出すことができません。余りにも衝撃的な出来事だったので、私自身も茫然としていたのでしょう。

初めての学会で目の当たりにした、この場面が脳裏に焼き付いて、その後、長い間、払拭されず、学会発表の際にはいつも恐怖感にさいなまれることとなりました。この恐怖感を克服するために出来ることは、準備のために十分な時間をかけること、原稿を繰り返し、繰り返し、読むこと以外にありませんでした。

次の年、1966年、日本細菌学会関東支部秋季大会で、私は初めての発表をしました。教授からの命令ですから、どんなに恐ろしくても逃げるわけにはいきません。会場は野口記念会館の講堂でした。一際高い舞台にしつらえられた演壇までの階段が何十段にも感じられました。震える足を踏みしめて、夢中で原稿を読み始め、そして終わりました。座長（尾形 学先生；当時、東京大学農学部教授）が何かを言われ、演壇のすぐ下あたりで、大柄な先生（輿水 韶先生；当時、尾形先生の助教授）が立ち上がり、何かを言い始めました。一瞬、悪夢に似た、あの場面が頭の中をよぎり、不吉な予感がしました。雲の上を歩いているような不安定な状態で、全神経を集中させて聞き取ることが出来た、いくつかの言葉から、質問の要旨を推定し、答えました。とにかく、この場をなんとか一時でも早く切り抜けたいという思いが強く、始めから逃げ腰でしたので、言葉足らずで答え

になっていないところが多々あったものと思われます。不明な点を一つ一つ聞き返されたものですから、かえって多言を弄することになってしまいました。不思議なもので、その時交わされた討論の内容と座長のコメントを今でも鮮明に思い出すことができます。その理由は、尾形先生と輿水先生が辛抱強く筋道を立てて質問をして下さったこと、会場でのやり取りをその後に思い出し、繰り返し、繰り返し、自問自答したことだろうと思います。その後、両先生からは様々な場面でご指導いただきました。

私は、生まれて初めて参加した学会の会場で、一人の研究者が同じ道を志す衆人の前で完膚無きまでに打ちのめされる光景を目の当たりにし、強い衝撃を受けました。昔の先生方が“学会は修羅場だ”と言っていたのを思い出します。安逸をむさぼることは厳に慎むべきでありますが、厳しさの中にも、暗闇の中に一筋の光明が射すようなご指導をお願いしたいものと常々考えております。

昭和のある時期、命をかけて戦い、幸いにして生還され、必死になって勉強してこられた先生方は現役を去られ、学会の雰囲気が随分変わりました。時は移り、人は変わり、今時、若い先生の中には学会で発表するのが怖いなどと言う方はおられないかもしれません、第65回日本細菌学会北海道支部学術総会で学会にdebutされる先生がおられましたら、楽しく晴れやかな気持ちで研究の成果を発表していただきたいと思います。支部会の先生方は先生のdebutを祝福し、暖かく受け入れてくださることでしょう。

第65回の学術総会が会員各位のご協力によって実り多いものとなることを祈念いたしております。

〔研究室紹介〕

旭川医科大学細菌学講座

旭川医科大学細菌学講座

東 匡 伸

本講座では、名称と異なってウイルス学の研究一本に絞っており、細菌学会への貢献度は無いに等しく、北海道支部会にもご無沙汰ばかりしております。此の度、支部長中島良徳教授から、支部会報への原稿依頼がありましたので、場違いな内容とは思いますが、研究室紹介をさせて戴きます。

本講座の研究の幹は、「ウイルスの増殖機構とその増殖抑制物質の作用機序の解明」にあります。現在、この幹から3本の枝を伸ばし、葉を繁らせ、実を結ばせる努力をしております。

(1) 生体のウイルス感染に対する防御機構の解明：生体のサイトカイン・システムを変動させ、免疫系細胞の動態を変化させる物質 (biological response modifier) が、ウイルス感染に対する生体の抵抗性増強にどの様な機作で関わるかの問題解明から、生体の防御機構を解明すべく、10数年来、研究を続けております。結核菌細胞壁成分trehalose-6, 6'-dimycolate (TDM) で処置したマウスがインフルエンザウイルス感染に著しい抵抗性を獲得すること、ここに関与するマクロファージ、T細胞、インターフェロン等を含む生体内のカスケード応答を明らかにしました。更にT細胞の内、 $\gamma\delta$ TCR⁺リンパ球 ($\gamma\delta$ リンパ球) が大きく関与することを見出しました。インフルエンザウイルス・ヘマグルチニン (HA : H1およびH3) 遺伝子を組み込み、細胞表面に安定にHAを発現するトランスフェクタント・クローンを樹立し、これを標的細胞として $\gamma\delta$ リンパ球の細胞障害活性を検討した結果、TDM処置マウス肺内の $\gamma\delta$ リンパ球はH1トランスフェクタントばかりでなく、H3トランスフェクタントにも顕著な細胞障害活性を示しました。この細胞障害活性は組織適合抗原複合体 (MHC) に依存しない活性であることも明らかにしました。現在、この、 $\gamma\delta$ リンパ球が、単純ヘルペスウイルスのgD遺伝子をトランスフェクトした細胞のgD糖蛋白をも認識するのかどうか、またこれらの結果から、 $\gamma\delta$ リンパ球の抗原認識モチーフの検索を行っております。

(2) インタフェロン (INF) ・システムの抗ウイルス作用とアポトーシス誘導作用：IFNが合成二重鎖RNA (poly I : C) によるアポトーシスの誘導を促進することを示し、IFNによるpoly I : Cの細胞毒性増強現象の機序を明らかにしました。更に、IFN処理細胞におけるアポトーシス誘導促進がIFNの新たな抗ウイルス作用機序の一つであることを、IFN-水疱性口内炎ウイルス (VSV) 系で示しました。この機構は、VSVなどRNA系ウイルスのみならず、DNA系ウイルスの増強抑制の場にも存在することを示し、この現象が、細胞のIFN処理によるアポトーシス抑制因子 (bcl-2) 、アポトーシス促進因子 (p53) の動態と密接に関連していることを明らかにしました。これらの機構に関わる遺伝子解析から、IFNの抗ウイルス作用機序の新たな展開に挑んでおります。

(3) ヘルペスウイルスのthymidine kinase (TK) 遺伝子解析：水痘-帯状ヘルペスウイルス (VZV) および単純ヘルペスウイルス1型、2型 (HSV-1、HSV-2) のTKの機能ドメインについて、遺伝子解析を行っております。

VZV-TKのC末端側の約60アミノ酸は酵素活性に必要ではないが、高次構造を維持し、熱安定性に関連することを明らかにし、このVZV-TKは、このC末端と細胞のdeoxycytidine kinaseと結

合したものであることを示す結果を得ました。現在、このTKの分子進化学的アプローチを試みております。一方、HSV-2 TKは抗ヘルペスウイルス剤BVdUとの親和性が低いが、臨床分離株中にBVdU感受性株を見出し、この変異株のTK遺伝子の解析から、78番目のアスパラギンがアスパラギン酸に置換していること、これがHSV-1 TKと似た抗ウイルス剤感受性に結びつくこと、即ちヌクレオチド結合部位の重要なポイントであることを明らかにしました。また、抗ヘルペスウイルス剤の内、作用機序の未だ不明なganciclovir (GCV) およびoxetanocin G (OXT-G) の作用機序を検討しております。これらの薬剤の磷酸化過程の検討結果、更にはVZVのprotein kinase (PK) 遺伝子をトランسفェクトしたVZV-PK発現細胞のGCVおよびOXT-Gの感受性を検討した結果から、これらの2剤はウイルスのTKばかりではなくPKによっても磷酸化され、抗ウイルス活性を示すことが示唆されました。ヘルペスウイルスの遺伝子には、その機能の不明な遺伝子が多く存在します。現在、その一つであるUL41遺伝子がウイルス増殖に如何なる役割を果たすのか、また、その活性の調節はどのような機構で行われているのかについても検討しております。

分野は違っても、微生物の特性、特に、分子レベルでの現象に多々類似性が存在します。支部会諸先生からご教示を戴ければ幸いです。

“HISLAE”

北海道大学免疫科学研究所附属免疫動物実験施設

小野 悅郎

“HISLAE”は、北海道大学免疫科学研究所附属免疫動物実験施設の英文呼称Hokkaido University, Institute of Immunological Science, Laboratory of Animal Experimentの頭文字に由来します。本施設は、昭和51年に免疫科学研究所で使用される実験動物の飼育、繁殖を目的として設置されました。昭和58年からは、免疫学の研究に必須の近交系動物を国内外の動物生産業者から容易に購入できるようになったことなどの理由から、繁殖規模を大幅に縮小し、主に動物実験を行う施設として運用されてきました。現在は主として近交系SPF (specific pathogen free) マウスが飼育されています。本施設では、マウス、ラット、ウサギなどを用いる一般的な免疫動物実験、遺伝子操作動物（トランスジェニックマウスやノックアウトマウスなど）を用いる実験、および国立大学動物実験施設協議会に定める「安全度2および3」の感染実験が行われています。施設内には、トランスジェニックマウス作製用実験室、学内利用のX線照射室、P3感染実験室などが整備されています。

本施設では、これまで細菌およびウイルス感染症を中心に、診断法の確立、免疫学的認識機構の解明、免疫学的感染防御方法の確立に関する基礎的研究、およびそれらの実験モデルの開発などをテーマとした研究が行われてきました。現在は、発生工学を利用して、ウイルス感染症の発症機序とその制御および癌遺伝子の発現調節に関する研究を推進しています。主な研究課題は、「仮性狂犬病（オーエスキー病）ウイルス遺伝子の転写・複製制御」、「センダイウイルスC蛋白の機能解析」および「血小板由来成長因子B鎖（c-sis）mRNAの翻訳調節」です。

「仮性狂犬病（オーエスキーボ）ウイルス遺伝子の転写・複製制御」の研究課題では、仮性狂犬病のintracellular immunization、即ち転写抑制因子による仮性狂犬病ウイルスの複製阻止の原理に基づく治療法の開発と分子育種法への応用について研究しています。具体的には、ウイルスの複製に必須であるウイルス遺伝子に対する転写抑制因子を人工的に作出し、この因子を発現することにより、ウイルス感染に対して抵抗するトランスジェニックマウスを作製しようとするものです。

「センダイウイルスC蛋白の機能解析」の研究課題では、センダイウイルスC遺伝子を導入したトランスジェニックマウスを作製し、C蛋白の動物個体全体へ与える作用、特に、インターフェロンの誘導など免疫系に及ぼす作用や病原性、さらに、C蛋白によるウイルスマRNAの合成阻害によるウイルス増殖阻害作用などについて検討できるものと考えています。

「血小板由来成長因子B鎖（c-sis）mRNAの翻訳調節」の研究課題は、1022塩基から構成される5'末端非翻訳領域を含むレポーター遺伝子を導入したトランスジェニックマウスを作製し、各種組織および各胎生期でのc-sis遺伝子発現に対する5'末端非翻訳領域の役割について検討するものです。この研究は、血小板由来成長因子B鎖同様、非常に長い5'末端非翻訳領域を保有する他の成長因子、サイトカインレセプターやプロトオンコジーンなどの発現調節に関する研究に貢献するものと考えています。

その他に、本研究所血清学部門との共同研究として、ヒト免疫不全ウイルスnef遺伝子導入マウスやボルナ病ウイルス遺伝子導入マウスの作製も行っています。

帯広畜産大学・獣医公衆衛生学教室35年の歴史

帯広畜産大学・獣医公衆衛生学教室

石黒直隆

帯広畜産大学獣医学科の獣医公衆衛生学講座は、昭和37年に教室が開設され、10講座からなる現在の獣医学科の中では、歴史にみて2番目に新しい教室である。初代の講座主任は、獣医微生物学講座から移籍された西武先生（現名誉教授）であり、当時としては究めて斬新であった環境衛生に関する研究を獣医公衆衛生学教室に移籍されてから開始され、原子吸光度分析計やガスクロマトグラフィーを用いて環境物質についての分析を多くなされました。また、当時、助手として加藤軍四郎博士が奉職されており、重金属がもたらす慢性毒性をラットを用いて病理組織化学の方面から研究されておられました。西武教授は、在職中、環境衛生の研究ばかりでなくブドウ球菌など病原細菌について多くの業績を残されました。

昭和50年3月、西武教授が停年退官された後、講座は、佐藤儀平教授により引き継がれました。昭和50年12月には、品川森一先生（現教授）が助教授として着任された後、51年6月には、私が助手として赴任し、新しい講座の体制が整いました。佐藤儀平教授（現：北海道ラジオアイソトープセンター所長）は、北海道大学・家畜伝染病講座に奉職されておられた当時から、鶏や家畜のサルモネラ症に関して多くの業績を残されており、病原細菌や人畜共通伝染病に関して豊富な知識と経験を有しておられました。昭和40年代後半から北海道内で本格化した乳用雄子牛の多頭化飼育によ

り、サルモネラ症の多発や薬剤耐性菌の汚染が大きな社会問題となったこともあり、北大に在職されていた当時から薬剤耐性菌の疫学やR因子（現在はRプラスミドと一般的に総称するが、当時は、R因子と呼ばれていた）の伝達に関する研究を行っておられました。帯広に赴任されてからは、サルモネラや大腸菌を中心とした腸内細菌の疫学研究と共にRプラスミドについての分子生物学的研究を新たに開始され、その後着実にその成果をあげられました。中でも温度感受性Rプラスミドの発見と、クエン酸利用プラスミドの発見は快挙であり、本支部会にても幾度か口頭発表いたしました。当時、Rプラスミドの接合伝達実験は、37度で行うのが常識であり、特殊な不和合群に属すプラスミドであるRts1を除いて、低温条件下で高頻度に伝達するプラスミドは知られていませんでした。佐藤儀平教授らが発見した温度感受性Rプラスミドは、その後大腸菌やサルモネラに広く分布する不和合群Hに属するプラスミドであることが明らかとなりました。クエン酸利用プラスミドの発見も小さな疑問がきっかけにより出発した研究であります。当時、当教室では大腸菌の同定を、IMViCシステムにより行っていました。鳩および牛から分離した多剤耐性大腸菌を同定中、シモンズ・クエン酸倍地に生えたり、生えなかったりする大腸菌様株を偶然多数見い出しました。もし、この不安定な性状を示す大腸菌を大腸菌でない別の菌種と勝手に判断して捨てていたら、クエン酸プラスミドの発見は、他者に譲ることになったかもしれません。当時、乳糖を分解するサルモネラ株が知られており、その乳糖分解性状は、プラスミド依存性であることが明らかにされていたこともあります。大腸菌に観察されたこのクエン酸利用能もプラスミド依存性でないかと佐藤儀平教授はきずかれ、その後の遺伝的解析を勢力的に開始されました。昭和50年代は、細菌やウイルスの遺伝学が急速に進展した時代であります。これらの研究分野が加速度的に進歩した要因として、制限酵素が容易に入手でき遺伝子のクローニングが手軽に行えるようになったこと、Maxam and GilbertによりDNAの塩基配列決定法が開発され、簡単に（簡単と書くには、この方法で苦労した筆者としては少しためらいがあるが、当時としては画期的な方法であった）、かつ長い配列を一度に解読できるようになったことが上げられます。当教室でも、分子生物学的解析や手法に詳しい品川森一助教授の協力をえて、疫学材料から得たクエン酸利用大腸菌について分子生物学的手法を用いて詳細に検討いたしました。その結果、クエン酸利用遺伝子のDNA塩基配列の決定、さらにはこの遺伝子はレプリコン間を転移するトランスポゾン上に局在することが次々と明らかとなりました。今では、大腸菌のクエン酸利用能は、プラスミド依存性であることが、Bergery's Manual of Systematic Bacteriologyに記載されており、当時の業績が忍ばれます。

当教室は、教育科目として獣医公衆衛生学の他に家畜衛生学を教授していたこともあり、佐藤教授が赴任されてから細菌とウイルスの2分野について研究を開始していました。細菌部門は佐藤教授と私が担当し、ウイルス部門は品川助教授が担当いたしました。品川助教授は、アデノウイルス遺伝子の構造解析を中心に、アデノウイルスの発癌遺伝子の検索、パルボウイルスの複製と遺伝子の構造解析と幅広く研究を展開し、分子生物学的手法をいち早く獣医ウイルス学分野に取り入れ切れ味のよい解析をされていました。また一方で、品川先生は、その当時は、ほんの一部の研究者の興味の対象にしかなかった羊のスクレイピー病原体に非常に関心を持たれていました。昭和56年から57年にかけて十勝の牧場で原因不明の奇病が発生し、スクレイピーの疑いが持たれました。品川先生は、発症羊の乳汁をマウスの脳内に接種することにより、奇病が羊のスクレイピーであることを日本で始めて明らかにされ、Obihiro株を樹立されました。これが、現在の教室の中心的研究テー

マになっているスクレイピー研究のなれそめです。

昭和63年3月、佐藤儀平教授がご退官後、品川森一先生が教授に昇任され、また私も助教授に昇任し、64年1月には、助手として堀内基広先生が着任されました。講座の研究テーマも、私のクエン酸利用遺伝子の研究を除いては、細菌研究からパルボウイルスやスクレイピーを中心とするウイルス研究へと徐々に移行していきました。獣医微生物学教室と共同研究を行っていた犬パルボウイルスの研究を堀内基広先生が引き継ぎ、パルボウイルス遺伝子の構造解析、近縁ウイルス遺伝子とのキメラを用いた宿主細胞の特異性領域の解析、パルボウイルスの分子進化研究など研究を幅広く展開されました。また堀内基広先生は、教室の中心テーマであるスクレイピー研究にも興味を示され、本格化したスクレイピー研究を支えてくれています。平成7年6月に帯広畜産大学付属の原虫病分子免疫研究センターの助教授に昇進された後もスクレイピー研究を続けられ、今年6月からは米国NIHのRocky Mountain Laboratoriesに留学され研鑽をつまれておられます。一方私は、クエン酸利用遺伝子の研究に一区切りをつけた後、真核生物の遺伝子構築のダイナミックさに魅せられ、牛T細胞抗原レセプター遺伝子の構造解析とそれに関連する牛の免疫疾患に関する研究へと自分の興味を展開しております。また、最近は古代家畜復原にむけた分子進化学的研究にも手を延ばしつつあります。

スクレイピー株の樹立後、教室の中心的テーマとなったスクレイピー研究は、品川森一先生を中心になされ、これまでに多くの研究成果を発表してまいりました。例えば、免疫抗体を用いた各種臓器からの病原体の検出、発症前の早期診断法の確立、宿主蛋白の遺伝子の多様性と発症との関連性、牛および羊のPrP遺伝子の構造解析とプロモーター解析など本病発症の原因究明に向け多方面からのアプローチがなされております。1988年頃より英国で発症が確認された牛海綿状脳症（狂牛病と報道）の報道は、一部のウイルス学者にしか興味がなかった本病が一般の人々にも大きく注目させるきっかけを作りましたし、他種動物への本病の伝播の恐ろしさをさまざまと見せつけられました。また、昨年英国で報道され表面化した若年性の新型クルイツフェルト・ヤコブ病（CJD）の発生の報告は、10年前に問題化した牛海綿状脳症の影響の大きさを思い起こさせるとともに、本病の伝播の恐ろしさを再認識させられました。本年になってからも新型CJD発症は、増加傾向にあり、牛海綿状脳症の影響の大きさを反映すると共に、本病が、人畜共通伝染病的性質を有していることを示唆しております。この数年、スクレイピー、CJD、クールー、牛海綿状脳症は、プリオン病として同種類の病原体と考えられ、研究者数も最近は増加傾向にあることから、さらなる研究の進展と病態解明に向けた取組みが期待できそうです。

35年間に渡る教室の研究史を簡単に書いてみました。記録に留めて置きたい出来事や苦労話は、まだ多々あろうかと存じますが、私の一存にて割愛させていただきました。佐藤儀平教授のクエン酸利用プラスミドの発見と品川森一教授のスクレイピー病原体の国内での最初の発見は、わが教室が誇りうる業績であり、その発見を目のあたりにしてまいりました後輩にとりましては、最大の財産と自負しております。両発見とも北海道内の検査材料から偶然見い出したものであり、捨てる事なく暖め、大切に育ててきた宝物と誇りに思っております。同室の後輩としてこれらの発見に続きたいものと願っている次第です。どうか今後とも支部会員の皆様方のご理解とご協力宜しくお願ひ致します。

平成8年度 日本細菌学会北海道支部活動記録

1. 日本細菌学会北海道支部学術集会

- 1月26日（金） 第137回日本細菌学会北海道支部集談会
「グラスサイレージに起因した牛のボツリヌス症（C型）について」
演者：三上祐二先生（根室家畜保健衛生所）
座長：砂川紘之先生（北海道立衛生研究所）
- 5月10日（金） 第138回日本細菌学会北海道支部集談会
「プリオンの増殖機構」
演者：堂浦克美先生
(九州大学・医学部・脳神経病研究施設・神経病理)
座長：小華和征志先生（北海道大学・医学部・細菌）
- 8月2日（金） 第139回日本細菌学会北海道支部集談会
「RAPD法の原理と細菌感染症への応用」
演者：牧野壮一先生
(帯広畜産大学・獣医学部・家畜微生物学)
座長：木村浩一先生（札幌医科大学・医学部・微生物学）
- 9月21日（土） 第64回日本細菌学会北海道支部学術総会
総会長：江口正志先生（家畜衛生試験場）
特別講演「HACCPによる食品の衛生管理について」
演者：豊福肇先生（国立公衆衛生院衛生獣医学部）
座長：西森敬先生（家畜衛生試験場）
一般演題17題
- 11月5日（金） 第140回日本細菌学会北海道支部集談会
「クモ神経毒素を用いた神経分泌機構の解明」
演者：Alfonso Grasso博士（イタリア国立研究機構細胞生物学研究所、イタリア国家顧問委員会委員）
座長：菅野富夫先生（北海道大学・獣医学部）
共催：日本細菌学会北海道支部
日本生理学会北海道支部

- 12月20日（金） 第141回日本細菌学会北海道支部集談会
「白血球粘着不全の病態と接着分子（ β_2 -インテグリン）」
演 著：永 幡 墓 先生（酪農学園大学・獣医衛生学）
座 長：中 島 良 徳 先生（北海道薬科大・微生物学）
2. 日本細菌学会北海道支部会報第5号発行（8月）
3. 日本細菌学会北海道支部評議員会・幹事会・総会
- 1月26日（金） 評議員・幹事合同会議
北海道支部総会
議 題：1) 平成7年度 行事報告および平成8年度 行事予定
2) 平成7年度 決算報告および平成8年度 予算案
- 5月10日（金） 幹事会
議 題：1) 平成8年度 集談会・行事計画
2) その他
- 8月2日（金） 幹事会
議 題：第64回日本細菌学会北海道支部学術総会のプログラム編成について
- 9月21日（土） 評議員会（臨時）
議 題：次期支部長候補について
- 12月20日（金） 評議員会・幹事会
北海道支部総会
議 題：1) 支部長・役員交代
2) 平成8年度 行事報告および会計報告
3) 平成9年度 行事予定および予算案
4) その他

日本細菌学会・北海道支部平成9年度役員名簿

支 部 長 中 島 良 徳(北海道薬大・微生物)

庶 務 小 林 弘 幸(北海道薬大・微生物)

会 計 松 岡 真由美(北海道薬大・微生物)

評議員

相 川 孝 史(道立衛生研究所)
磯 貝 浩(札幌医大・医・動物実験)
絵 面 良 男(北大・水産・微生物)
菊 池 直 哉(酪農大・獣医・伝染病)
齊 藤 玲(札幌・大倉山学院)
品 川 森 一(帯広大・獣医・公衆衛生)
砂 川 紘 之(道立衛生研究所)
平 棟 孝 志(元酪農大・獣医・伝染病)
前 川 静 枝(札幌臨床検査センター)
森 洋 樹(北医療大・薬・免疫微生物)
小 林 邦 彦(北大・医・小児)

幹 事

磯 貝 恵美子(北医療大・歯・口腔衛生)
鎌 口 有 秀(北医療大・歯・口腔細菌)
小 華 和 征 志(北大・医・細菌)
高 橋 樹 史(酪農大・獣医・伝染病)
西 森 敬(家畜衛生試験場)
藤 田 晃 三(札幌市衛生研究所)

会計監事

松 宮 英 視(天使短大)

東 匡 伸(旭川医大・細菌)
井 上 勝 弘(東京農業大・生化)
小 野 悅 郎(北大・免研・動物実験)
熊 谷 満(北海道文教短大)
佐 藤 儀 平(北海道RIセンター)
白 輜 敏 一(帯広大・獣医・微生物)
馬 場 久 衛(北医療大・歯・口腔細菌)
藤 井 暢 弘(札幌医大・医・微生物)
皆 川 知 紀(北大・医・細菌)
渡 辺 繼 男(北大・歯・口腔細菌)
吉 田 哲 壽(市立札幌病院・形成外科)

遠 藤 菊太郎(北海道薬大・微生物)
菊 池 裕 子(北大・歯・口腔細菌)
杉 本 千 尋(北大・獣医・家畜伝染病)
武 士 甲 一(道立衛生研究所)
林 俊 治(札幌医大・医・微生物)

日本細菌学会(北海道支部関係)理 事 皆 川 知 紀

評議員 東 匡 伸、林 俊 治
磯 貝 浩、藤 井 暢 弘
中 島 良 徳、皆 川 知 紀
名誉会員 林 喬 義、梁 川 良

日本細菌学会北海道支部 歴代支部長名

1. 昭和22~31 中 村 豊 北大・医・細菌学・教授、道衛研・所長
2. 32~33 根 井 外喜男 北大・低温研・医学部門・教授
3. 34~35 山 田 守 英 北大・医・細菌学・教授
4. 36~37 平 戸 勝 七 北大・獣医・家畜衛生学・教授
5. 38~39 植 竹 久 雄 札医大・微生物学・教授
6. 39~42 高 橋 義 夫 北大・結核研・予防部門・教授
7. 43~44 三 浦 四 郎 北大・獣医・家畜伝染病学・教授
8. 45~46 飯 田 廣 夫 道衛研・副所長
9. 47~48 大 原 達 北大・結核研・細菌部門・教授
10. 49~50 林 喬 義 札医大・微生物学・教授
11. 51~52 熊 谷 満 道衛研・疫学部長
12. 53~54 鈴 木 武 北大・歯・口腔細菌学・教授
13. 55~56 梁 川 良 北大・獣医・家畜衛生学・教授
14. 57~58 黒 田 収 子 北薬大・微生物学・教授
15. 58 (残任) 山 本 健一 北大・免研・血清学部門・教授
16. 59~60 飯 田 廣 夫 北大・医・細菌学・教授
17. 61 伊佐山 康 郎 家畜衛試・北海道支場・室長
18. 62~63 小 熊 恵 二 札医大・微生物学・教授
19. 64~平成2 宮 川 栄 一 家畜衛試・北海道支場・室長
20. 平成3~6 皆 川 知 紀 北大・医・細菌学・教授
21. 7~8 平 棟 孝 志 酪農大・獣医伝染病学・教授
22. 9~ 中 島 良 徳 北薬大・微生物学・教授

編集後記

平成9年1月1日より前支部長平棟孝志先生のあとをうけて支部長をお引き受けしてもう9ヶ月を過ぎようとしております。この間、5月29日には、「O157など腸管出血性大腸菌に対する北海道での現状とその対策を語る」公開シンポジウムをエルムの新緑映える北大・百年記念会館において、支部主催のもと開催できました。当該感染症に対する大衆の関心の高さに加え、公開ということでマスメディアにとりあげられたこともある、会場は定員凡そ100名程度のところ、300名程度の人々が詰めかけ、急遽会場からの机の搬出や椅子の搬入などの応急対策が講じられました。これは会員の方や業者の方達の臨機応変の協力があったればこそと、北海道支部会員の結束の堅さ、頼もしさをあらためて強く感じた次第でございます。ここに御協力いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

またご多忙のなか会報6号にご執筆いただいた先生方には深謝申しあげます。支部長として今後とも支部会員の交流と相互の絆の強化は勿論、支部会会則に則り、支部会のより一層の発展と活性化のため微力ながら尽くす所存でございます。当支部は細菌学の名称はついておりますが、会則23条には「他の学会・研究会等と合同で集会を開催することがある。」となっておりますので、細菌学だけではなくウイルス学、真菌学、寄生虫学、免疫学、腫瘍学等広く細胞生物学にかかわる領域との交流などは勿論のこと、時流に添った支部会会則の改定についても、今後取り組まねばならない課題であります。

日本細菌学会 北海道支部
支部長 中島 良徳